

4 田舎の小さな村は、今、上杉鷹山のような村長を必要としている。

(1) 上杉鷹山の財政再建

上杉鷹山は藩主自らが率先して節約した生活を行い、透明な会計を大事にした。

→ 今の地方自治に当てはめると、村長、自らが率先して、人件費や施設管理費等の行政運営費の節約に努めるとともに、今の行政の財政状況や会計を隠すことなく、村民に説明し、明らかにすることを大事にする。

(2) 上杉鷹山は多くの意見に耳を貸す

「上書箱」という、意見を投げ入れるための箱が設置され、所属を明確にすれば藩士だけでなく、農民や町民も意見書を入れることができた。

→ 村長は、行政を自分の思い通りにしたくて、自分に意見を言うものを排除し、イエスマンだけを自分の周りにおきたがります。しかし、イエスマンは、百害あって一利なしです。村長は、自分に都合の悪い意見や反対意見を聞ける度量がなければなりません。裸の王様になってしまっただけでは、正しい村民のための行政はできません。

(3) 上杉鷹山の精神の改革

① 上杉鷹山は、「民の父母」となることを、自分に言い聞かせ、自分にも他人にも、厳しい態度で律してきた。「民の父母」とは、「藩主としての自分の仕事は、父母が子を養うごとく、人民のために尽くすこと。」という意味です。

→ 村長としての自分の仕事は、父母が子供を養うように、全ての村民が安心して豊かに暮らせる行政を行うことが大事です。高齢者の生活も、子育てや子供の教育についても、責任を持つことです。

そのためには、村長は、村民の暮らしを第一に考え、行政運営の経費の質素儉約に努めなければなりません。住民のための事業費は削って、立派な庁舎を建設したり、自分のレガシーのための箱モノをつくったりしてはいけません。

② 上杉鷹山はしきたりにはこだわりません

江戸時代は、昔からのしきたりが数多く残されていましたが、上杉鷹山は、大胆にもしきたりの一部を見直しました。

→ 行政にも前例踏襲や横並び主義など、悪しきしきたりはたくさんあります。そういう、悪しきしきたりに縛られていたら、新しい取り組みも、大胆な行政改革もできません。

行政をする者にとっては、前例踏襲、横並び主義で、他の市町村と同じことをしている方が楽ですし、たとえ、それが失敗だったとしても、自分の責任は問われないというリスク回避もできます。

しかし、田舎の小さな村が生き残るためには、前例踏襲で、他の市町村と同じことを

していたのではだめです。他の市町村とは異なる新しい取り組みと、大胆なチャレンジをしなければなりません。

③ 上杉鷹山の改革への誓い

上杉鷹山は、藩主になったとき、上杉家の祖新春日社に、「民の父母」の心構えを第一に、質素儉約を忘れないなど、藩主個人としての行動を誓いました。

更に、翌年には、地元の守り神である白子神社に、政治改革実行を誓いました。

→ 村長は、「民の父母」になるの心構えを第一に、思い切った行政改革を行い、行政運営費の質素儉約に努めなければなりません。そして、村民が安心して豊かに暮らせるようにするための努力をしなければなりません。

しかし、現実には、村民のための事業費は削って、立派な庁舎を建設したり、自分のレガシーのための箱モノをつくったりしています。しかも、村民のための事業費は削っても、自分たちの給与を削減することはしません。

今の行政は、義務費という自分たちの給与や行政運営費を十分確保した上で、余った部分があれば、村民のために使うという形になってしまっています。

(4) 産業の開発

① 上杉鷹山は、米沢藩の強みを生かした、特産品の開発に力を注ぎました。
単なる儉約一筋ではなく、領民の生活向上のために努力しました。

→ 田舎の村では、行政運営にあたっては、村民の生活を第一に考えなければなりません。行政運営費の節約と言っても限界があるし、その節約によって、しわ寄せを受けるのは、いつも決まって村民だからです。

それに、今の国の財政状況を考えると、過疎地の村だからと言って、地方交付税という市町村のすねかじりを、続けさせることができる時代ではなくなってきています。

田舎の村では、村民の生活の向上のためには、高齢者だろうと子育て中だろうと、働ける人には働いてもらわなくてはなりません。昔は、田舎の村では、年寄りになっても、みんな働けるうちは、あたりまえに働いていました。

しかし、田舎の村では、高齢者の方が、年金だけではやっていけないから働きたいと思っても、子育て中の方が、子供の教育にお金がかかるから働きたいと思っても、働く場所がなくて働けないのが現実です。

だから、村自ら、村営工場、村営農場を経営し、とにかく働く場所をつくらなければなりません。特に、高齢者の方や子育て中の女性の働く場所をつくることです。

田舎の村では、都市部のように企業誘致や民間活力の活用は期待できません。

だから、明治維新の時に、国を豊かにするために、国が官営工場を作ったように、村が自ら、村営工場や村営農場をつくり、村を豊かにする必要があります。

② 田畑をひらく

藩の財政を安定させるためには、農業生産を増やし、安定させることが重要と考え、上杉鷹山は、農民だけでなく、藩士に対しても田畑の開墾を促しました。

また、藩士たちに、田畑の開墾や治水のための土手修理などを実施させています。更に、藩士の次男・三男が農村に移り住み、田畑を開墾することを進めたということです。

→ 村の財政を安定させるためには、住民や企業を増やし、税収を増やす以外にはないのですが、田舎の小さな村には、それは、なかなか難しいことです。

だから、村が自ら起業し、村営工場、村営農場をつくり、村民が誰でも働ける場所をつくるのが重要です。また、村の行政運営費の不足分を、全て、国に頼るのではなく、自ら稼ぐという考え方も必要です。

上杉鷹山が藩士たちに、田畑の開墾をさせ、藩士の次男・三男が農村に移り住み、田畑を開墾したように、村の職員も村営工場、村営農場の働き手になり、職員自らが、汗をかくことも必要です。

行政の良くないところは、全てのことを自らやろうとしないで、全て、お金で解決しようとするところです。村が直接した方が効率的であることでも、補助金・助成金を出して、全て、人にやってもらい、行政自ら、やろうとしないところです。

しかし、田舎の村では、行政が自ら率先して、住民とともに汗をかき、経費節減に努めるという姿勢が必要です。また、職員も民間企業と同じように、自分の給料分くらいは、稼ぐつもりになってもらわなければなりません。

③ 領民が生き延びる策を講じる。

藩の財政は、飢饉や凶作が続きかなり苦しいものでした。飢饉・凶作に備える蔵を、各村に建て、毎年一人一升ずつの粃を蓄えさせました。何を差し置いても、領民が生き延びる策を取っていたのです。

→ これから田舎の村では、高齢者の生活のことを真剣に考えなければなりません。

それは、農業者、林業者、自営業者等の国民年金だけの人が多いからです。国民年金だけの方は、田舎の村であっても、なかなか生活していくことはできません。

昔は、田舎の村では、親が歳を取って働けなくなったら、その子供が同居し、経済的面でも親の面倒を見るということは、当たり前に行われていました。しかし、その当たり前も、今は田舎の村でも、当たり前ではなくなっていました。

昔、田舎の村では、「結」という助け合いのシステムがありました。農繁期に農作業を助けてもらったら、お金や品物で返すのではなく、労働で返すという、お金を介さない助け合いのシステムです。

お金を介在させたら、この「結」という助け合いのシステムは成り立ちませんから、全てのことを、お金で解決しようとする都会では成り立ちません。

そのため、都会に住むお金のない人は、実際に困って、誰かに助けてもらおうと思っ

でも、誰も助けてくれる人がいないため、行政かボランティアに頼るしかないのです。

この結という助け合いのシステムは、田舎の村では、少し前まで当たり前に行っていたことです。

この助け合いシステムについては、「6. 田舎の村独自の地域支え合い制度、互助会制度の創設」で詳しく記述します。

(5) 村長は自ら意識改革をし、上杉鷹山の様にならうとしなければ、村政は良くならない。

① 上杉鷹山は、「国家と人民のために立てられている君主であって、君主のために立てられている国家や人民ではありません。」と言っています。

→ 村長は、自分の名誉や利権のために村政を行うのではなく、村民のための村政をしなければなりません。しかし、自分が選挙で当選し村長になると、村長で居続けることを第一に考えてしまい、村民第一の行政をしようとは考えなくなってしまいます。

確かに、選挙に当選しなければ、いくら理想を掲げてみても、より良い行政をしようと思っても、それを実現することはできません。だから、次の選挙で勝つことを第一に考えてしまうのもやむを得ません。

そうであっても、村長は、自分が村長で居続けるための努力ではなく、上杉鷹山のように、「民の父母」となって、村民が安心して豊かに暮らせるようにするための努力をしなければなりません。

② 上杉鷹山は、「国家は、先祖から子孫に伝えるところの国家であって、自分の身勝手にしてはならないものです。」と言っています。

→ 選挙の時は、次の世代に負担は残さないなどと、良いことを言って選挙戦を戦いますが、選挙に勝って村長になると、自分が村長の時だけうまくいけばよいと考えてしまうようです。

将来、村が借金の返済ができなくて破たんしようが、村民が困ろうが、そんなことは知ったことではないという行政をしてしまうようです。

民間企業の社長さんで、自分が社長の時だけうまくいけば良い、自分が社長を辞めた後、会社が潰れようがどうなろうが知ったことはないなんて考えている人はいないと思います。自分が社長を辞めた後も、会社が順調にいくように、会社を今よりも、もっと良くしたいと考えて、日々、努力していると思います。

民間企業の社長さんと、村長との考え方の違いは、どこから来るのでしょうか。それは、民間企業の社長さんは、その会社への今までの貢献により社長になるのに対し、村長は選挙に勝ちさえすれば、誰でも村長になれるのです。

もし村長が、将来、次の世代の人が困らないようにと考えて、村の借金返済のために、公共料金を少し上げたりでもしたら、その村長は、次の選挙では確実に落選する

でしょう。

将来の村のことを考え借金を返済するより、たとえ借金を増加させたとしても、今の有権者が喜ぶことをした方が、次の選挙でも勝利し、村長で居続けられるからです。

また、自分が村長の時、作った借金で、将来、村が破たんしたとしても、その責任をとらされ苦労するのは、運の悪い、その時の村長で、村の破たんの原因を作った当時の村長は、何の責任も負いません。

私の住む大桑村では、現在、人口、3600人ですが、20年後、人口が2500人になると推計されています。そんな小さな村なのに、今の村長は、20億円もの大金をかけて、図書館と多目的ホールがある新庁舎を建設しようとしています。

高齢者ばかりの小さな村で、誰が図書館や多目的ホールを使うのでしょうか。そんな立派な庁舎を建設して、誰がメリットを受けるのでしょうか。

高齢者が半数近くの村で、高齢者に用事があったら役場に来いと言うのでしょうか。身体の不自由な高齢者は、どうやって役場に行ったら良いのでしょうか。高齢化が進んだ田舎の村では、用事があったら役場に来いではなく、行政の出前サービス、訪問サービスが必要です。

上杉鷹山が言うように、自分が村長の時だけ良ければ良いと、身勝手な行政をするのではなく、将来、子孫が困らないように、今よりも良い村と行政を、次の村長にバトンタッチしていかなければなりません。